

学力格差の最前線から

村上 呂里

二〇〇七年より全国学力学習状況調査が始まって以来、年々、沖縄県の教育現場では、「全国最下位脱出」の掛け声のもとに狂騒とも言うべき事態が繰り広げられるようになってきた。春休みには子どもたちも教師も学力調査問題に「慣れ」させる補習に追われ、最近は大生までボランティアとして駆り出されるようになった。

「全国最下位」という「順位」が、沖縄県民に重くのしかかる。

筆者が共同研究チームの一員として関わっている小学校は、「全国最下位」の沖縄のさらに最下層に位置づいていた。

この小学校の教室の窓一面には見渡す限りの海が広がる。校門には、ハーリー（豊漁や航海の安全を祈って行われる爬龍船競漕の祭り）で勝利したという手作りの船が飾られている。小学校開校から間もない十数年前、地域の海人が子ども達への願いをこめ、寄贈したという。海人文化に豊かに彩られた小学校である。一方で、この小学校では「子どもの暮らし向きの困難」を感じる教員が100%（ときどきある…88%／よくある…12%）を占める。沖縄県全体が貧困率においてきわだって高く、「子どもの貧困」を切実な課題とするが、そのなかでもより深刻な困難を抱えた学校といえよう。学力格差やさまざまな格差の最前線にある小学校といえる。

この学校の先生とお話していたとき、この地域の人びとは「この島で有名な」祭りへの参加は許されなかった」という言葉を聞き、ハッとさせられた。「農民の祭りに、なぜ海人が来るのか」と言われたという。郷土史を繙くと、この地域には明治三十年頃から、ヤンバル（山原・沖縄県北部）、奄美諸島、宮古島等から「ヤトイングワ（雇い子）」として人身売買されてきた人びとが居住してきたという。「ヤトイングワ」という名称は買う側のものであり、売る側は「イチマンウイ（糸満売り）」と称した。離島や農村部の貧困を背景としたこの人身売買は、戦後昭和30年代まで行われ、その詳細は福地曠昭編『実録・沖縄の人身売買 糸満売り（イチマンウイ）』（那覇出版社、1983年）に詳しい。10歳前後の子どもが売られ、「奴隸」と言っつよい絶対服従の環境のもとに苛酷な労働を強いられ、「海学校」には行けても小学校に行くことは許されなかった。ときに仕置きで命を失うものもいた。この地域では戦前約300人位の「ヤトイングワ」が存在したという。

この地域の小学校に関わるからには、この地域の人びとの思いに触れたいと思つているとき、たまたま給食をいっしょに食べた子どもとの会話から祖父が海人であることを知る。この祖父Tさんにインタビューを試みることとなった。（二〇一二年三月十一日）口が重い祖父に替わり、祖母がときに補う形で説明してくださった。以下の語りを編集し、一まとまりの文章としてまとめたものである。

父親は、沖縄本島北部ヤンバル（山原）の出身。ヤトイングワ（雇い子）として売られ、9〜10歳頃、八重山に連れてこられた。「あ

んなに寒いときも、裸で潜って苦しかったよ。」と子どもたちに常々話していた。

父は21歳で満期を迎え、独立し、海人の仕事をする。自分の子どもは絶対にヤトイングワにはさせないという思いで、9名の子どもを育て上げた。

そんな父親を見ながら、自分も14歳で海人になる。

12〜3メートル位を素潜りする父親を見て、「あんなに潜れるのかなあ、感心だなあ。」と思い、自分は中学には行かない、海人になると決心した。同じ年代で中学校に行けなかったヤトイングワの出身地は、奄美大島やヤンバル、宮古島の人が多かった。

海の仕事が終わってもヤトイングワたちは、水道がないために、速くまで水汲みに行かなければいけなくて、かわいそうだった。

「売られてきた人しか海人にはならないよ。」

「学校出ない人しか海人はやらないよ。学問のない人しかやらないよ。」

と周りから言われてきた。

だから長男が、高校に行かないで海人をやりたいというときは怒った。「海人やるのは、大学出てからでも遅くないよ。」と言った。

物心ついたときから、「一枚板の下は地獄」(くり船の底の下は地獄)とよく言われた。海で亡くなった人も多い。

「ひじゅるむぬん ぬーせんなー。うみんちゅもにんじんやみい(冷や飯も飯か、海人も人間か)」という言葉があるよ。

(お孫さんに海人を継いでほしいですか?との問いに) Tさんは首を

振り、「自然との闘いですからね」と答えた。それでもご自身は「海人の仕事がいちばん」とおっしゃった。大きな魚を釣ったときの喜びは忘れられないと言う。そして、海人の「心の中心」は、「ハーリー」と語った。インタビュ後、ご自身が若い頃出演したハーリーのTVドキュメント番組のビデオをうれしそうに見せてくださった。また、家に飾ってある珊瑚(昔、ご自身が採取したものやご自身が作ったハーリー船の模型を誇らしげに見せてくださった)。

「海人」の文字は、今日、沖縄で売られるTシャツを踊るように飾り、観光ブランドとしてもはやされる。そこに、海の厳しさと日々対峙し、文字通り命を賭けて海の恵みを頂き、「海への恐れ」をもとに苛酷な環境を生き抜き、子どもたちを育ててきた人びとの歴史の尊厳があることを忘れてはなるまい。こうした歴史は、現在、沖縄県の唯一の夜間中学校・珊瑚舎スコールで学ぶ生徒の方々の生活史とも通い合う。

学力格差の最前線は、沖縄の近現代史、基地問題や原発労働者における沖縄出身者の占める率の高さなどの構造的差別と深く結び合

う。さてこの小学校は、今年度の全国学力調査正答率で県平均を十点近く上まわり、「全国平均」並みとなった。経済格差・階層格差と学力格差との相関に関する教育社会学者の指摘を踏まえるとき、「奇跡」ともいえるだろう。喜んで報告するのはむろんない。痛切な痛みとともに報告している。このことの重みと痛みは、いかにして誰に受け止められるのであろうか。